

- ① … 正智深谷、初優勝 令和3年度学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会埼玉県予選 少年男子、関東ブロック大会を突破 第76回国民体育大会関東ブロック大会 2021年度第1回通常理事会開催
- ② … 特集／3種「繋ぐ」インタビュー1 さいたま市立尾間木中学校 高橋 淳
- ③ … 特集／3種「繋ぐ」インタビュー2 三郷ジュニアフットボールクラブ 代表・監督 福田貴司
- ④ … 特集／3種「繋ぐ」インタビュー3 成立せブラフットボールクラブ 監督 山田育也
- ⑤ … 特集／3種 技術委員会・指導者養成部会より 部会長・笹川智久氏、部員・高島敏之氏に聞く
- ⑥ … 大会記録●県内大会 1種・大学・2種高校
- ⑦ … 大会記録●県内大会 2種高校・3種クラブ・4種
- ⑧ … 大会記録●県内大会 女子・フットサル ●県外記録 1種・社会人・2種高校
- ⑨ … 大会記録●県外大会 2種クラブ・4種・女子・シニア 編集後記

●発行/(公財)埼玉県サッカー協会 〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和1-21-18雁ヶ音ビル204号室 Tel048-834-2002・Fax048-834-2004 <http://www.saitamafa.or.jp/>

正智深谷、初優勝

令和3年度学校総合体育大会 兼 全国高校総体サッカー大会埼玉県予選

6月6日から「令和3年度学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会埼玉県予選」が開催され、6月23日に決勝戦が行われました。決勝は準決勝まで4試合連続1対0で勝ち上がってきた正智深谷と3試合で14得点という攻撃力を見せつけた武南との対戦になりました。

試合は武南が主導権を握りながらも、前半23分に正智深谷の山口陽生選手がロングシュートを決めて先制。その後も武南が攻勢をかけるものの、正智深谷の壁は厚く、この試合も正智深谷が1対0で勝利しました。正智深谷は初優勝。また高校総体へは8年ぶり3度目の出場となります。



優勝 正智深谷高校

少年男子、関東ブロック大会を突破 第76回国民体育大会関東ブロック大会

7月11日、栃木県において「第76回国民体育大会関東ブロック大会」サッカー競技少年男子の予選が開催されました。1都7県の前年度のポイントを集計し、埼玉県は3位となり、開催県である栃木県との対戦となりました。

今回は関東からの枠は4。一発勝負で勝てば、三重県での本大会出場が決まることになっており、関東トレセンリーグという強化の場もない中、難しい戦いに挑みましたが見事に1対0で勝利し、本大会出場を決めました。おめでとうございます。第76回国民体育大会「三重とこわか国体」でも優勝を目指してがんばってください。

大森健司監督（県立草加高校教諭）

「U-13から見続けてきた前任者が転勤となったため、急遽監督に就任しました。そのため私が十分にチームを把握できないままのスタートとなり、かつこのコロナ禍にあり練習時間も多く作ることができない中ではありましたが、なんとか関東ブロック大会を突破することができました。

相手の栃木は栃木SC(J2)U-18のメンバーが中心のほぼ単独チームでしたので、練習も十分にこなしており、チームとしての連携はできていました。そのため選手個々の能力は高い埼玉でしたが、難しい展開になってしまいました。その中でよくやってくれたのは選手たちです。選手一人ひとりのがんばりがあって、結果を出すことができました。本大会では優勝できるよう、強化を進めていきますので、応援よろしくお願いたします」

7月11日 真岡市総合運動公園陸上競技場

埼玉県 1-0 栃木県
81分 得点者 石川 颯



埼玉県少年男子チーム

2021年 少年男子

背番号	位置	名前	所属チーム
1	GK	江橋 勇斗	浦和レッズユース
2	DF	真壁 拓海	大宮アルディージャU18
3	DF	市原 吏音	大宮アルディージャU18
4	DF	高橋 岳	大宮アルディージャU18
5	DF	浅井 一彦	大宮アルディージャU18
6	MF	土谷 飛雅	昌平高等学校
7	MF	安部 直斗	大宮アルディージャU18
8	MF	河原木 響	浦和レッズユース
9	FW	石川 颯	大宮アルディージャU18
10	MF	阿部 水帆	浦和レッズユース
11	FW	清水 星竜	浦和レッズユース
12	GK	高田 裕也	大宮アルディージャU18
13	DF	山野 悠	浦和レッズユース
14	DF	早川 隼平	浦和レッズユース
15	MF	種田 陽	大宮アルディージャU18
16	DF	田中 瞭生	昌平高等学校

成年男子

監督 吉田 弘
尚美学園大学サッカー部総監督。元日本代表

女子

監督 神戸慎太郎
浦和レッズレディースユース監督

2021年度第1回通常理事会開催

5月28日、浦和PARCO・コムナーレ10F 浦和コミュニティセンターにおいて「2021年度第1回通常理事会」が開催されました。

- 第1号議案 「2020年度事業報告について」
- 第2号議案 「2020年度決算報告について」
- 第3号議案 「2021年度収支予算書修正について」
- 第4号議案 「2021年度第1回定時評議員会の開催について」
- 第5号議案 「埼玉県サッカー協会登録料変更について」

以上の議案が承認されました。

なお、第5号議案「埼玉県サッカー協会登録料変更について」につきましては、別途ご連絡を致しますので、何卒よろしくお願いたします。

特集／3種「繋ぐ」インタビュー1

顧問が替わっても「繋ぐ」。繋がるためには。

さいたま市立尾間木中学校 高橋 淳

「僕と関わったことでサッカーが嫌いにならないように」

—失礼ですが、まずは高橋先生の経歴をお聞かせください。

高橋 別所サッカー少年団でサッカーを始めて、白幡中学、市立浦和高校に進みました。ちょうど池田先生（一義氏・現、川口北）が赴任されて一年目でした。そして茨城大学でプレーしましたが、人数的に少なかったこともあり、監督的なこともやっていました。

臨採として与野東中で教員をスタートしましたが、まずはバスケット部の顧問をさせていただきました。柏さん（悦郎氏・SFA理事／技術委員長）の後に栗原（勝義氏）さんが赴任されていたところで、「関東大会に出場するから補助として来てくれないか」と声をかけていただきました。翌年はサッカー部に引っ張ってもらい、栗原さんだけでなく、神立さん（朋次氏。南浦和中学校監督）も一緒という環境は大きな経験になりました。

その後、上大久保中、大谷口中と異動しました。浦和でもサッカーそのものの土壌があるなしというのは大きいことを痛感しましたが、先輩たちとの付き合いから他県の中学、高校ともつながり、次第に「面白い選手がいるな」と認めもらえるようになりました。そんな中で南部トレセンのヘッドコーチを経験させていただいたことも大きかったですね。

そして、歴史ある尾間木中学に赴任したことで、今まで以上にいろいろなところから注目していただくようになりました。この地域には素材として面白い選手がいます。そういう選手たちが、高校、さらにはその先のステップに進む中でしっかりと関わっていきたくと考えています。

—まさに「繋がって」いる中で、ここまでいらしたのだと思います。さて、高橋先生のモットーを教えてください。

高橋 サッカー部の保護者会で話すことですが、「私と関わったことで、子どもたちがサッカーを嫌いにならないかなと思っています」と。プロ選手になったり、フットサルに行ったり、私のように指導者になったり、またサポーターになったり。とにかく、この後もサッカーに関わってくれればいいなと思っているのです。

ですから、進路のサポートには全力を尽くします。選手たちから、県内の私学の高校に興味があると聞けば、もし付き合いがなければ誰かを通じてアポを取って会ってもらおうようにします。全国レベルの強豪高校の指導者の皆さんと名刺交換をさせてもらっていると、わざわざウチの試合を見に来ていただいたりするのです。プレッシャーは感じますけどね。

—くどいですが「繋ぐ」ことを本当に意識されていますね。次に、この地域の特性をどう感じていますか。

高橋 尾間木中の今の特徴というと、狭いところでもドリブルを仕掛けていくという姿勢ですね。校区的に勝負強い尾間木サッカー少年団の子どもたちと、遊び心を持っている大牧サッカー少年団の子どもたちが集まってきます。彼らが融合してくれています。

そもそも、狭いところでもドリブルをという考え方は、神立さんが



高橋 淳 先生

築いてきたもので、それを私が引き継ぐことになりました。公立と言えども継続性というのは重要です。

その上で私は、個を大事に育てることを重視しています。それもボールを持つことを怖がらない選手、パスを出すまで、シュートを放つまで責任を持てる選手を育てたいと思っています。そのために、神立さん同様、ドリブルの感覚を磨くことを求めています。例えば相手ボールになってしまっても、すぐに奪い返すことができるよう、常に1対1で勝負できるように指導しています。

ギリギリだから発掘できる

—実際、指導の中で具体的に実践されていることはなんですか。

高橋 練習をやっていると、一人ひとりのいいところが見えてくるものです。左足のキックがすごいなあ、足が速いなあ、ロングボールを蹴ることができるなあ……。そういうことを見つけるために、チームとしての組み合わせを変えたり、ポジションを変えたりして試していますね。そもそも選手同士はお互いにいいところがわかっていますから、周りの選手たちが「あいつを活かそう」と考えるようになるものです。個々の面白さ、個性を消さないで見つけていく中で、「すごい」と気づくものなのです。そのためには、それ相応のトレーニング量が必要ですし、練習試合を含めた試合数というが必要になります。

ですから、土日になるとチームを二手に分けて活動することが多いです。もともとそんなに部員が多くありませんから、二手に分けられると人数的にギリギリになったりもします。まだ成長期です。試合出場の機会ではできるだけ多く持ってもらえるように工夫しています。もちろん、どの選手も均等にというのはできませんが、短い時間でも輝く瞬間はあるのですから。だからチーム編成がギリギリになっても、二手に分かれて活動する意義があると思っています。選手たちにはチャンスがあるんです。

ギリギリなので、全員が全員、彼らがやりたいポジションをできるとは限りません。ただ、それが発掘に繋がります。

例えば、同じようなレベルのGKがいても、どちらかの選手しか出場できませんよね。そんな中、二手に分けられると人数がギリギリですからいろいろとポジションをいじるわけです。あるとき、片方のGKをサイドバックで起用したらいい感じでプレーしてくれて、それで定位置を確保したという選手もいます。意外とどこでもできる選手はいるものだから。

—まだまだ可能性はあるでしょうから、どう試すのか。指導者次第ですね。

高橋 そうですね。あと私としては、手を使わなければ何をしてもいいと常に言っています。そもそも子ども時代からふざけたプレーもしていたじゃないですか。そういうプレーも「していいんだ」と教えています。しかし、それでボールを奪われたのでは困りますから、やるからには責任を持って、適当にならないプレーをするようになっていきますね。

それでも三年生になると戦術も加えていきます。そもそもサッカー偏差値は高い選手たちですから、吸収していつくれます。この年代の中でだんだんとサッカーも「大人」になってほしいものです。「あれしかできない」では困ります。例えば、ボールをしっかり持つことができれば放つことができるようになります。

それでもフィジカルの違いがはっきりと表れる年代でもあります。他チームを見ると、登録選手数が少ないせいか、1年生が出てきたりします。確かに体格的に難しい面が多いのですが、中には「あれで一年生なの？」という選手もいますし、10分、20分ならば通用する

という選手もいます。そうそう、浦和でもサッカー人口が減っているような気がします。一年生大会では木崎中や原山中も合同チームで出場するんですよ。街中でサッカー遊びができなくなっている地域は、厳しくなっているような気がします。

—木崎中や原山中が合同チームですか！一年生大会とはいえ、現状を憂いてしまいますね。

クラブから部活へ

高橋 大谷口中に行って、すぐの学総で準優勝しました。学総では2回準優勝、新人戦も準優勝2回、U-13では優勝し、冬季大会も一度優勝しています。もともとはクラブに行っていた子どもが多かったのですが、次第に部活に来てくれるようになりました。

桜木中学校時代、敗者復活戦の県大会への出場決定戦まで出たことがあるんです。桜木中って、そんなにサッカーの土壌は無いんです。でも、上手い子は埋もれていまして、彼らを鍛えました。ノーマークだったからかもしれませんし、私の運もあったかもしれません(笑)。また地域の皆さんからも評価していただきました。

その後、大前選手(元気。当時、大宮アルディージャ。現ザスパクサツ群馬)の息子が入ってきたんですよ。彼はエスパルスのジュニアユースにいたので、てっきりクラブチームに行くものだと思っていたので、ビックリしました。

そんな中で感じたのは、地元の少年団の皆さんが中学校の部活をどう思っているのか？ということ。こちらとしても頑張ってきた選手をつぶしたくはありません。そのためには、情報交換も含めて混じり合うことが重要と考えました。

必要なのは自チームの勝敗だけで見ないことです。その子の人生を見てあげること。よく言いますが、サッカー部の子どもたちの面倒は見ます。ただ、ご家庭も協力してください。というのは、中学校の部活はやりたい子どもたちを断れる場所ではありませんからね。

でも、クラブを辞めたから部活でサッカーを続けるという生徒がいた場合、即レギュラーにしていいいのか？という葛藤はあるかもしれませんね。やはりそこはここまで部活の中でがんばってきた生徒たちへの配慮も必要だと思います。

—葛藤と配慮ですか。

高橋 中体連の良さとしては、サッカーだけでなく、授業を含めて学校生活をがんばらせることです。顧問だけでなく、他の先生たちと協力しながら普通の生活を見続けていきます。クラブを辞めて、部活に入るとするのは子どもにとっては大きな、苦労した上での決断です。彼らにとって部活は「受け皿」ではなく、心機一転できる場であってほしいのです。元々いる仲間たちにとって、プラスになるような存在になってほしいのです。

特集／3種「繋ぐ」インタビュー-2

スタッフ31人全員が教え子。まさに「繋ぐ」

三郷ジュニアユースフットボールクラブ 代表・監督 福田 貴司

中澤佑二氏への指導～クラブ立ち上げ

—県立高校に勤務されながら、ジュニアユースを立ち上げて指導されてきました。最初の赴任先である三郷工技で、中澤佑二さん(元日本代表 DF)を指導されましたね。

福田 入学の挨拶に来てくれたときには、168cmでしたから、そこから20cm伸びたんですね。

中澤から朝練に呼び出されるんですよ(笑)、高さなど、相手になる選手がいなかったから。とにかくヘディングは武器になると思ったので教え込みました。半身になってのヘディング、ユニフォームをつかまれながらでもヘディング……できるようになるまでトコトンや

—もっと、クラブから部活に移籍が活発になってもいいと思う反面、部活というコミュニティが機能するかどうかは難しい問題ですね。実際、入ってみなければわからないでしょう。また打ち解けるにも、多少時間もかかるかもしれません。ただ、問題は部活に入る子どもの意識なんですね。

顧問を「繋ぐ」

高橋 その通りですね。さて、高校に向けてサッカーを続けたいのであれば、学力が重要です。本当に入りたい高校があれば、勉強もがんばるものです。こちらとしては、学力のアドバイスもさることながら、その高校が「この選手に合うのかどうか」の見定めも大事なことです。それはやはり、その高校の顧問と面識があるかどうかでも違ってきます。その高校、その顧問の先生を知らなければ適切なアドバイスができません。そういう意味ではやる気を与えると同時に、選択肢を与えています。

—「繋ぎ方」は様々でいいと思います。その分、顧問の先生方は大変でしょうが。

高橋 そう、先生たち、顧問が大変なのです。

今回「繋ぐ」というテーマですが、それは4種で育った選手たちを3種で受け、さらに2種へということだと思います。ただ中体連の場合、顧問を「繋ぐ」というのも大事なことです。いい流れで指導していても、やがて異動があります。だいたい6、7年で次の学校へ行くことになり。ここで「流れ」が途切れると、意識の高い選手たちはクラブに行ってしまう。正直、顧問次第です。

そこで思うのですが、なんとか9年はしたいのです。というのは、9年間あると1年目に指導した選手が教育実習生として戻ってきてくれるからです。大学生になった彼らをまた見ることができ、指導することもできます。彼らからすると、教育実習先である母校に恩師がいるかどうかは大事なことです。それこそ恩師に憧れて、教職の道に進んでくれるわけです。

母校に戻ってきて、やっと中学時代に言われた言葉の意味に納得したり、自分なりにかみ砕くことができたりするものではないでしょうか。そこで顧問としては、もう一つ、二つ伝えられることができれば「流れ」ができ、伝わっていくと思うのです。今、それが叶わない歯がゆさがあります。

仲間を作りたいですね。仲間を増やしていかなければならないと思っています。ただこれから、中学の部活動そのものの見直しが進んでいきます。その流れを見定めながら、子どもたちにとって、どのようなサッカー環境を整えていけばいいのかを考えていきたいと思っています。

—顧問も「繋ぐ」。なるほど、それもサッカー環境ですね。今回はありがとうございました。

るんです。また当時、私はルーマニア代表チームを追いかけていて、準備室に試合のVHSビデオを並べていたら「足元でつなぐサッカーを研究したいので貸してください」って来たり。足元の技術はありませんでしたが、あの頃から向上心は半端なかったですね。

実はある大学から推薦入学の話がありました。顧問の村田さん(義昭氏)はプロになることを公言していた中澤に対してこうおっしゃいました。「こんなちっぽけで終わっていいのか?」。プロのレベルを知っている私としては「無理だから、大学でいいのでは」と言ってしまうようなところでしたけど。3年の選手権予選でチーム作りに欠かせない夏休みに村田さんは「チームのことは心配せずブラジルに行ってい」でした。私にはそう言える器が無かったですね……。結

局、中澤抜きで夏を過ごしたチームは、準優勝した農大三に残り3分の失点により、0-1で負けてしまいました。

中澤は卒業後1年間ブラジルのFCアメリカというチームに身を置いて、就労ビザ取得のために戻って来たのですが、その間も毎日高校の練習に来ていました。そんな中、当時のヴェルディ(川崎)でユースチームの監督をしていた旧知の田口さん(貴寛氏)をお願いして練習試合を組んでもらって、それを契機にヴェルディの練習生になりました。

—そこから中澤さんの活躍が始まるわけですね。その流れで三郷ジュニアユースと続くわけですね。

福田 そうなんです。三郷工技においては、まあまあ成績を収めるようになりました。要は「サッカーをやりたい」という子どもたちが入ってくれるようになったからです。ただ、限界も感じました。「工業高校には……」「大学に行きたい」等々、断りもありました。悔しかったですね。このままでいいのかと自問自答しました。そこで「中学生を指導する」という考えになっていきました。一人でも三郷工技に入ってくれる子が増えてくれればという願いでした。

実際問題として、三郷の少年団の子どもたちを見ているといい選手がいましたし、チームとしても強かった時代でした。ただ、中学校にサッカー専門の指導者が不在の中学校も多くて、サッカーを続けたい子どもたちを受け入れるチームもありませんでした。だからでしょうか、道を外れてしまう子もいましたね。

実は、そんなことを考える一年前から地元中学校を夏休み前に引退した中学3年生を対象に毎週木曜日に練習をしていました。見ている中で個々の伸びしろや個性がわかるようになったことは大きかったですね。ただ、週に一度の指導だけでは子どもたちの「クセ」を直すことができません。今でも子どもたちを上手くすることは難しいです。チームを強くすることよりも難しいです。ただ中3ではなく中1から基礎的な指導ができれば、と考えたのです。「ジュニアユースから工技へ」ですよ。

—それで1997年にクラブを立ち上げられたんですね。練習場所の確保が大変だったのではないですか？

福田 いえいえ、三郷工技のグラウンドでやらせてもらっていました。ただ、夜に体育館を使用していたことで、校長先生から「事務から電気代が高いと指摘されたのはあなたのせいか」と怒られて、その年を最後に草加高校へ転勤することになりました。

草加高校サッカー部にはすでに顧問がいたものですから、女子公式テニス部の顧問となり、本格的にジュニアユースを強くしようという思いになりました。グラウンドは河川敷もありますし、市内の中学校の校庭にはすべて照明がついています。また三郷高校は土日に学校開放をしていたので、さほど苦労はありませんでした。

とにかく97年に入ってくれた1期生が3年になったときに、県クラブユース選手権大会で優勝してくれたものですから、高校での勤務と並行しながら、ジュニアユースの指導に取り組みました。

月に1回、「父母会」を開催

福田 私は準備を大切にしようですから、ジュニアユースを立ち上げるについても、いろいろな方々と話をさせていただき、交渉しました。実際、それまでにクラブを立ち上げてはダメになる事例を見てきました。

大事なことは「保護者とのように信頼関係をつくるか」でした。選手である中学生は、まだまだ自立できていません。ですから、まずは保護者です。特に子どもたちが「勉強しなくなった」「問題行動をするようになった」ことを「クラブチームのせい」にされてしまっただけではありません。

ですから、二ヶ月に1回は「父母会」を開催してきました。クラブとしての取り組み方、選手本人の成長、そして進路を一緒になって考える場です。進路については、高校で教えているからこそ話ができるので、他クラブとの差別化ができていっていると思います。

5年目からセレクションをする際、筆記テストを行うようになりました。すると、この地域では“過去問”が出回るくらいになってしまいました(笑)。基本的に勉強をしない選手は受け入れません。入ってほしい選手は手を抜かない子です。また学力の高い選手の保護者は意識も高いのです。ですから、いまでも父母会への出席率は90%超え。こういう時代ではありますが、やはり対面が重要だと思いますし、保護者の皆さんも保護者同士の情報交換を有益だと思ってくださっています。



福田 貴司 代表・監督

現在、籍は三郷北高にあります。三郷ジュニアユースのAチームだった選手は強豪私学にいきます。他のクラブさんもそうだとおもいますが、県1部でレギュラーという選手は、その多くが私立高校に進学してしまいます。歯がゆいですけど。

「伝える力」

—余談になりますが、他のクラブの指導者の皆さんとはスタンスが異なるだけに、いろいろと見られているところが違うような気がしています。

福田 試合を見ていて思うのは、選手たちに対して「伝える力」をお持ちなのは、熱意ある中体連の指導者の皆さんの方が多いかなと思っています。彼らの、この年代を理解してのコーチングを見て、上手いなと思いますね。ここというときの声のかけ方、締め方、さらには自由にさせるところ……そういうさじ加減は上手い人が多いです。

クラブチームのスタッフを見るとプレーや戦術理解に長けている人がほとんどです。ただ、そういう実績だけでなく、もっと教育者としての勉強をしてもらえるといいなとは感じています。やはり「伝える力」でしょうか。

今、クラブスタッフは17名(いままで携わった指導者も含めると31人)います。全員が教え子です。うち9名が小・中・高と分かれませんがその多くが教員です。大学生もいます。彼らは指導者として父母会に関わり、鍛えられています。そして全員が「伝える力」を持っています。「どのタイミングでどういう話をするか」ができるんですね。頼もしいです。

今回「繋ぐ」というテーマをいただいて思ったことは、子どもたちが4種、3種、そして2種と過ごし、クラブから出て行った選手たちが三郷ジュニアユースの指導者として戻ってきている現状です。そこは三郷ジュニアユースが一番ではないでしょうか。クラブの中では、サッカー以外のことを教えることも必要です。それがわかっています。

—逆に言うと、福田さんから「伝える力」を学んだ選手たちが戻ってきてくれたということですね。もう一つ、具体的な話を聞かせていただけますか。

福田 コーチが選手たちを集めて話をするとき、選手たちから「コーチからまたいい話が聞けるぞ」と信じてもらいたいですね。確かに見本を見せることは大事です。でも、選手たちをくすぐるような伝え方ができているかどうか。ここは2種・3種のポイントですね。

さらに保護者の中にはサッカー経験者が増えていきます。その分「そうじゃない」という声も増えていきます。そこで現状と目標をしっかり伝えて、正しく振る舞えるかどうか。日々、学んでくれています。

4種の立ち上げ

—そこまで行くと、現場に立たないと身につかないのかもしれない

んね。さて最後になります。昨年度、4種のチームも立ち上げられましたね。

福田 以前は強かった三郷の少年団ですが、近年はなかなかいい成績を上げることができていませんでした。そんな中、少子化もあり、新しいクラブチームができるなど環境が変わってきています。こちらとしては、少年団の皆さんと上手くやってきて、ここまで来ました。ウチが4種のチームを作ることで皆さんと敵対関係になるようなことは避けたいと思っていました。ところが、逆に少年団の皆さんから「やってほしい」と声をかけていただいたのです。実は5、6年前からの話ですが、やはり反対の声もありましたので、話し合いを進めていき、昨年のコロナウイルス発生で少年団自体が活動できなくなったことで、立ち上げることになりました。ですから、2年目。今年の4種リーグ（5年生のみ）でリーグ2位になったのです。すでに県大会に出場がきまりました。来年を楽しみます。

特集／3種「繋ぐ」インタビュー3

6年を通じて「オン・ザ・ピッチ＝オフ・ザ・ピッチ」

成立ゼブラフットボールクラブ 監督 山田育也

あの時代に学んだことを伝えてください

—正直に言って、成立ゼブラさんは「成立学園高校」サッカー部の下部組織という一方的な認識から、「結局は赤羽に行くんだろうな」と思っていたので、申し訳ないのですが存在をさほど強く感じることはありませんでした。ただ、この企画を考えたときに「ゼブラがある」と思いついた次第です。

確かに高校は都区内、高校総体予選や高校選手権予選は東京都大会を戦うわけですが、でも選手たちは埼玉出身が多いわけですね。ということは、逆に埼玉の子どもたちの進路の選択肢が増えているわけで、決して悪いことではないと改めて思った次第です。

前置きが長くなりましたが、そもそも山田さんはどのような経緯でゼブラのスタッフになられたのでしょうか。

山田 奈良県の中学を卒業して、2001年、「ここから変わる」という成立高校（現成立学園中学・高等学校）に入学しました。元ジェフ市原の社長をされていた福田さん（浩平氏）が理事長となり、宮内さん（聡氏。現、ASエルフェン埼玉代表取締役会長）が総監督として、さらに元ジェフ市原の方たちがスタッフとして入ってきました。当時掲げたのは「3年計画」。3年で全国に出ようという目標でした。実際、その目標は叶い、私が3年生のとき成立高校は高校選手権に初出場できました。



山田 育也 監督

その3年生のとき、2002年にこの成立ゼブラのスクールとジュニアスクールが始まりました。このとき、ゼブラの練習やスクールに参加した経験がありました。あれから13年になります。

私は東洋大学でもサッカーを続け、卒業後はさらに選手を続けながらサッカーを学ぼうと考えていました。しかし、そんなときに、ゼブラのスタッフに欠員が出たことから、五十嵐さん（和也氏。現、成立高校サッカー部監督）から誘っていただきました。自分のやりたいこともありましたが、お世話になった成立学園に少しでも恩返しできるならここで子供たちのために頑張ろうと思いました。

振り返ると、思春期に成立サッカーのベースを植え付けられたわ

私としては、このチーム、C.F.PASIONに新たな魅力と新たな課題を持っています。身体能力頼みにしない選手、伸びしろのある選手を育てていきたいということと、6年生がいない中で相手チームに対抗するには技術がないとどうしようもないということです。彼らの成長が楽しみです。

—C.F.PASIONでいい準備をして三郷ジュニアに進んでもらえれば、またそこで成長できるということですね。いろいろと可能性の広がりを感じます。

福田 今、県クラブユース連盟には91クラブが登録していますが、うち30クラブが4種のチームを持って活動しています。そこで“飛び級”を使って、できる選手は3種の試合に出ています。下からしっかり育てていこうというビジョンのあるクラブは伸びていますね。

—今後のご活躍を楽しみにしています。ありがとうございました。

けです。どのように子どもたちと接するかと考えたときに思ったのは、あの時代に学んだことを伝えていだけだということでした。それは誰から言われたことでもなかったのですが、スタッフの皆さんに対して疑問を持つこともありませんでしたし、スタッフの皆さんからも疑問に持たれることもなく、迷いなく指導の現場に立つことができました。今では成立サッカー事業部のスタッフに私を含めてOBが4名います。少しずつですが、クラブの中で「血」が濃くなってきたことを感じています。

—その成立学園のベースとは、どういうものでしょうか。

山田 「オン・ザ・ピッチ＝オフ・ザ・ピッチ」です。特にオフ・ザ・ピッチのときにどのような行動ができるかを問われます。

当時の成立高校のサッカー部は弱小で、偏差値も高くなく、正直先輩たちは怖かったです（笑）。そんな中でオフ・ザ・ピッチの大切さを毎日のように言われてきました。これが私自身のベースであり、スタンダードでした。そしてサッカーを通じて、サッカー以外のことを学ばせてもらいました。

そもそも、当初から福田さんと宮内さんが考えていらしゃったことは、他県に選手を取りに行くのではなく、ウチで思い切りサッカーをやりたいという選手を集めて、育てていこうというものでした。よく福田さんから聞かせてもらったのが、ドイツで見たという風景の話でした。地域で一貫したサッカー、スポーツの環境を作り、子どもたちが芝の上でサッカーを楽しんでいく中でトップチームを目指すというストーリーでした。ですから、成立学園は赤羽にあります。まずはこの驚宮、久喜の子どもたちを、思い切り走り回らせてあげようというのが、ゼブラのスタート。クラブとしては、サッカーの裾野を広げて、安心して遊べる場所づくりを目指しています。そして、3年間だけでなく、6年かけて立派な人間に育てていこうと考えています。

「指導者の前に教育者でなければならない」

—まさに教育現場とサッカー指導をリンクさせて、一貫教育、一貫指導をしていこうということなんですね。

山田 私は高校の3年間だけではありましたが、やはりここで自分の土台を作ってもらったと考えています。

近年、全国的に中高の「6年計画」の話を耳にします。ただ、それが強化至上主義に走っているように感じています。地方の私学中学が東京から全国から選手を集めて、結果を出し、さらに高校へとつなげていくところが出てきています。それはチームの強化が保護者の皆さんのニーズになっているような気がするのです。

私たちは「成立で思い切りサッカーをやる」と声をかけています。しかし、昨今のこのニーズを耳にすることで、私たち自身が変換期なのではないかと考えることがあります。内部的にも結果にこだわっていますが「現状でいいのか？」という議論はしています。また一方で、誰でもサッカーを楽しめる環境をという願いから、火曜日には未就学児から小学3年生までを対象にしたスクールも始めました。「上手くなるより好きになる」というコースです。

ですから、実際には6年間以上になりますね。もちろんジュニアユースまでゼブラでも、別の高校に、という選手もいます。

—同じ「6年計画」でも、他との違いを一言でいうと。

山田 学校を母体に行っているということでしょうね。成立学園の公式なクラブ、中にあるクラブとして活動していて、ジュニアユースから高校に進学する際の選択肢になっています。

—確かに、私学の中高一貫校以外では学校組織の中にあるクラブというのは稀だと思います。

特集／3種 技術委員会・指導者養成部会より

指導者ライセンス講習会の現状とC級のカリキュラム変更

部会長・笹川智久氏、部員・高島敏之氏に聞く～柏悦郎技術委員長と共に（聞き手／広報委員・荒川裕治）

コロナ禍における講習会

—まず、昨年度のC級ライセンス講習会は本当に大変だったと思います。

笹川 6コースを予定していましたが、2コースはできませんでした。開催するにあたり、いろいろと神経も使い、対策を講じて行いました。

高島 とはいえ、特別なことはしていません。ちょっとした声かけとして、グラウンドで集合する際は「少し距離を取ってください」とかですね。どちらかといえば屋外よりも屋内での感染対策が重要で、エアコンを入れながらも窓は開けっぱなしで扇風機を回すという感じです。あと長時間はやらない、ですね。

笹川 週末を使って、土日～土日で開催するので、一週間分の健康シートは提出してもらいました。こちらもそうですが、受講生と共に注意しながら行いました。何かあったら、遠慮無く連絡してください。

—では、特に問題なく終えたわけですね。

高島 リフレッシュ講習会でお一人帰っていただきました。あとは今年ですが、ご連絡をいただいて、B級の受講を来年に延期された方がいました。あとはリフレッシュ講習会で欠席が1名。受講者の皆さんのモラルに助けられていると思っています。

—なるほど、ライセンス講習会を受講される皆さんですから、モラルは当然ということでしょうね。

C級を取って満足

柏 ひとつよろしいでしょうか。お二人に御相談があります。JFAの技術委員会が打ちだした「トレセン認定制度」についてです。

すでにご存じだと思いますが、県トレセン、地区トレセンともスタッフに関してはA級ライセンス、B級ライセンス保持者が必須となりました（表参照）。U-16に関しては、県高体連の指導者が関わっており、その基準はクリアしています。しかしながら、U-12～15、女

山田 それが私たちの育て方、スタイルということでご理解いただけると幸いです。私たちとしてはジュニアユースに入ってくれたのであれば、6年間、しっかり面倒を見ます。

成立学園という看板があることで信用されている部分は大きいと思っています。ですから、私たちはサッカーの指導者ではありますが、宮内さんからは「指導者の前に教育者でなければならない」と叩き込まれました。子どもたち、選手たちを導いてあげなければならないのです。ここまでを振り返ると、サッカーよりも躰を徹底した20年だったと思います。

埼玉の子どもたちは全国各地から注目されています。地域的に埼玉に残ってくれば、もっと埼玉は強くなるのではないのでしょうか。ただ、進路先の選択肢として成立学園もあることを知っていただければ嬉しいですね（笑）。

—ありがとうございました。県東部をもっと盛り上げてください。

子に関しては基準を満たしていません。基準を満たしていないと補助金などにも影響します。

なんとかさらに上位の資格を取得してもらえようような取り組みを検討していただきたいと思います。

—具体的に問題のカテゴリーという？

柏 まずは女子です。そもそもトレセンスタッフが足りていません。今後、国体では女子のU-16カテゴリーの大会も始まります。女子全体の充実が急務です。ただ、実際のところ今年から始まるWEリーグの各クラブでもアカデミー所有を義務づけられており、トップチームも含めてライセンス保持者には引き合いが多いと聞いています。

あとはU-12とGKライセンス保持者が少ないですね。

—3種年代はいかがですか？

柏 なかなか中学校の指導者の皆さんには受講してもらえていません。地区トレセンでは指導者資格を持っていない人にもスタッフとして入ってもらっている状態です。

笹川 いろいろありますね。まずはGKについてですが、レベル1（旧C級GKコーチライセンス）はJFAに対して47FAでも取得できるよう講習会開催を要望しています。ここは絶対数が足りないという問題ですので、来年度からはぜひやりたいと思っています。

高島 私からはその前段階として、更新が必要なC級ですが毎年、年間100人が受講して取得してもらっています。ただし、4年後にほぼ同数の数が減少する、失効しているという結果が出ています。要は継続されていないということです。この人たちに継続してもらえるかどうかです。

笹川 リフレッシュ講習会は県としても開催しています。今年も10コース開催予定で、かつ人気も高く、申し訳ないのですが1回の人数を絞らせてもらっているほどです。現実的には、これだけの開催では県内の皆さんを対応することはできません。ですので、連盟、4地区、市町FA、少人数の集まりでもいっしょに声をかけてくださいとお願いしています。でも、なかなか取得者側からの働きかけは難しいようです。

それこそ、この後の話で出ると思いますが、昨年からC級ライセンス講習会の内容が大きく改定されました。そういう変化をリフレッシュ講習会では学んでいただきたいと思います。でも「一度C級を取って満足」という人も多いのが現実です。

もちろん、「学びの場が欲しい」と積極的にリフレッシュ講習会を受講される方もいらっしゃいます。このリフレッシュ講習会そのものも活性化させていかなければならないと考えています。例えば、10



笹川 智久氏

回行リフレッシュ講習会について、それぞれテーマ設定をするとか、もっと受講者のニーズに応えられる内容にするとか。「ここに来ればもっと学べる」ということを理解してもらい、活用してもらえようになれば失効そのものが少なくなるのではないかと考えています。

高島 さらに現実的な話をすると、本当はリフレッシュ講習会に行きたくないんですよ。今さら指導実践するなんて大変ですし、それも20ポイントを取得するには1日ずっと参加しなければいけません。多くの皆さんが、リフレッシュポイントのために「しょうがなく」受講しているように見えるのです。ニーズに合わせるとなると、e-learningや実技なしの講習会が多くなってしまいかもかもしれません。ただ、JFAからは「指導実践が基本」と通達が出ていますよね。

でも、指導実践をすると20ポイント、座学では10ポイントと分けて開催しています。ある意味ニーズに当てているのですが、「でも、それでいいの?」という話なんです。

指導は面白い

—なぜ指導するのか? なぜライセンスが必要なのか?

笹川 そうなんです。ですから、この話は根っ子と幹の部分なんです。根っ子が無いと幹は育たないし、倒れてしまうのです。

もっとインストラクターが受講者に対してアプローチしていかなければならないのでしょうか。

高島 そもそもライセンスを取得するということがどういうことなのでしょう。私はそれまでやっていた指導そのものを整理したかったという理由があります。

他の人はどうなのでしょう。例えばA級ライセンス取得のためにやっている「トライアル」の受講生の皆さんは、内容のハードルは気にされていませんが、講習会の日数であったり、費用がハードルなっていると聞きますね。私としては、C級でもD級でも最終日には「もう一つ上を目指しませんか? 面白い世界が待っているよ」と言っています。

—そういえば、荒川さんの受講動機は?

—もう20年前の話です。まだ「準指」(公認準指導員)の時代で、村松さん(浩氏・現浦和学院高校サッカー一部監督)と高島さんにお世話になりました。あのときは、指導者養成のカリキュラムがどんどん変わる中、新しい用語用語も入ってきました。仕事柄、指導者の皆さんのインタビューをすることが多く「これからは共通語を学ばないといけない」と思ったからなんです。ただ、実際に指導するとかは考えていませんでした。

高島 やはりベクトル合わせですよ。日本のサッカーの今と、これからどこへ行こうとしているのかの。

例えば、D級の講習会に来るお父さんコーチに「C級どうですか?」と言うと、だいたいが怖がられますね。でも、そこはアプローチ次第だと考えています。「おいでよ」って。そうしたら、ある人がC級に来てくれたんです。さらにその人が「B級を受けたいと思います」って言ってくれたんです。こちらとしては「えーっ!」ですよ(笑)。

B級まで来てくれるんです。うれしいですよ。そこはエンジンをぶらさげることが大事ですが、それ以上に楽しんでやってもらえるかどうかだと思いますね。C級のときにリラックスさせてあげて「がんばればB級も取れるかも」って声をかけてあげるのも手かなと。

講習会のプロモーションビデオを

—すごいですね。なかなかD級スタートでB級を受講される方は少ないと思います。経験者はC級からスタートしますからね。

笹川 それが根本なのかなと思います。「サッカーの指導がしたい」、もっと指導したくなるような雰囲気づくりは必要ですね。

そもそも受講生の皆さんはライセンスを取るという覚悟の上で、ちょっと構えてやっていらっしゃいます。それも、知らない人たち同士だったり、D級だとサッカー経験のない人もいらっしゃる。D級はわずか2日間なんですけどね。

その中でインストラクターが「指導することは難しくないですよ。面白いですよ」とか、「C級に行くともうちょっと面白い景色が見えますよ」という声かけをするのは大切なことかもしれませんね。

柏 そういう場面とか、講習会の風景を撮影して皆さんに見てもらいましょうか。SFAのホームページでもできますよね。キッズリーダー講習会も合わせて。楽しそうなところを見てもらうというのは大事ですね。やりましょう。

高島 D級からC級、C級からB級に進む人が少ないというのが課題です。

—プロモーションのビデオは作成できますし、ホームページも活用していただきたいと考えています。広報委員会として、もっと技術委員会とコラボしていく必要があると思います。

柏 そういうことも含めて、JFAから求められている「47都道府県サッカー協会(FA)におけるFAコーチ(技術担当者)」の任命を検討しなければならないと思っています。

笹川 確かに、もうフルタイムで関わってくれる専任者がいないと事業が追いつかないという状況です。

高島 必要ですね。先程からの話で言えば、現在SFAで開催しているB級ライセンス講習会は1コースだけ。やはり2コースないとニーズに当てられません。県内で取得できることで時間的にも金銭的にも抑えられると思う人もいますよ。

柏 「早くA級、B級を」と言っても、すぐに取得できるものではありません。裾野を広げる、整えることも同時にやっていかなければいけませんね。

—早く適任者が見つかるといいですね。あと、もう少し指導者同士の交流、具体的に言えば、講習会の同期でグループLINEを作ってもらうなどして、連絡を取り合ったり、お互い刺激し合ったりということもあっていいと思います。

高島 そういう中で「失効するなよ」とかね(笑)。

—グループLINEにはインストラクターも入ってもらっていいと思います。もう少しサッカーの仲間として、年齢やカテゴリーを越えて皆さんが「繋がる」ことを意識してもらいたいですね。そのためにインストラクターの皆さんにはがんばっていただきたいです。

コーチング、プランニング、そして分析

—さて笹川さん、C級ライセンス講習会の内容が大きく変わりました。どう変わったのか、それについてどう思っているのかをお聞かせください。

笹川 C級ライセンスの改訂に関しては、テクニカルニュースの97号をご覧いただきたいです(KICKOFF登録者はJFAのホームページから閲覧してください)。大きく変わりました。基本的にワールドカップ後に改訂されますが、今回はいつもより大きな改訂です。

簡単に言うと、これまでのC級ライセンス保持者の指導対象はU-12年代、B級はユース年代に、そしてA級はプロ以外の1種と限定されていました。そして、選手に対しての問かけとデモンストレーションの有効活用の必要性を伝えてきました。

それが今回のC級は、選手が課題を解決できるよう導くことが求められています。そしてカテゴリーは関係なく、このC級で「指導の基礎」を学ぶという考え方になりました。具体的に言えば、最後の指導実践はゲーム形式にして行いますが、C級は5対5から8対8、



高島敏之氏

ちなみにB級は7対7から11対11になりました。

—人数を増やすことで、より実践的な中で指導できるかですね。

笹川 指導するというか…それこそ今までは講習会の中で、インストラクターから一方的に指導をされていたと思いますが、そこに双方向性を求めています。グループワークが増えました。その中に、ファシリテーターとしてインストラクターが入るといった感じですね。ですから、これまで1コース32~34人受講できましたが、今回からは24人以下です。

—受講者に考えさせるんですね。だから、指導実践の中でのゲームも指導者役の受講生が一方的な指導をせずに、選手役の受講生に考えさせる必要があるんですね。

笹川 そうです。だから従来ならば指導実践もテーマがあって、そこから選べばよかったのですが、それを3~4人のグループを作ってプランニングすることになりました。それで日数が増えたのです。

また、今回から「分析」が加わりました。4対4のゲームを見て気がついたことをメモしてくださいと。どういう視点で見るのか……例えば、個人戦術の視点でメモするとか。それを付箋に書いて、貼ってくださいというのをやっています。

西川さん(誠大氏。JFA コース育成サブダイレクター/SFA 科学委員長)から「難しいですよ」とは聞いていましたが、1年かかって、それがわかりました(笑)。

—「分析」の必要性は以前から求められていたことでした。何を見

るのか、どう見るのか。捉え方によって違うことが多く、かつ「分析」できない人が多いというのが課題でした。

高島 改訂版を作る前に、実際に担当した西川さんと話をしたときに「これまでコーチングを特化してきましたけど、減りますよ」と聞かされました。実際、コーチングに、プランニング、そして分析が加わりました。

プランニングについてはトレーニングを考えましょうと。そして、それを「やろう」と動機づけまで。分析では、何をかわってもらえたかを確認します。トレーニングでの「狙い」に対して、上手くできたかどうか。選手は失敗してもいいんです。失敗したならば、どうすればよかったのかを考えるわけです。

これらを受講生にどう上手く誘導していくのか。そこがインストラクターの腕の見せ所ですね。

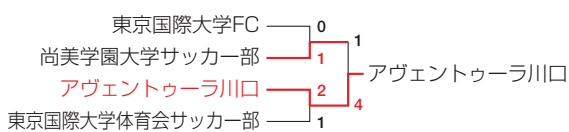
笹川 受講生の皆さんには学んでもらう場であり、気づいてもらう場です。そこに指導現場で活かせるよう、受講生同士で刺激し合います。より受講生側に立った講習会と言えます。

—ということも、もっと伝えていかないとイケませんね。これから受講する人たちにももちろんですが、現在ライセンスを持っている人たちにも。そして、失効した人たちにも「もう一度学んでみようか」と思ってもらえるように、促していきたいものです。これを機に、もっと技術委員会からの情報発信をお手伝いしたいと思います。よろしくをお願いします。

大会記録 ● 県内大会

1種

2021年度彩の国カップ 第26回埼玉県サッカー選手権大会
4月17日、5月8日 埼玉スタジアム第2グラウンド他



※優勝したアヴェントゥーラ川口は初優勝。埼玉県代表として「天皇杯 JFA 第101回全日本サッカー選手権大会」に出場



アヴェントゥーラ川口

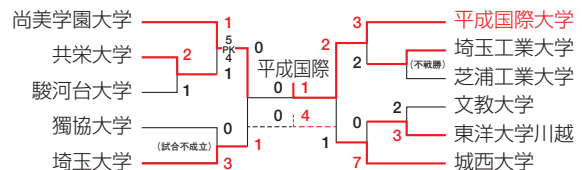


決勝 アヴェントゥーラ川口 vs 尚美学園大学サッカー部

大学

アミノバイタルカップ 第10回関東大学サッカートーナメント大会 県予選

4月3日~24日 SFAフットボールセンター他

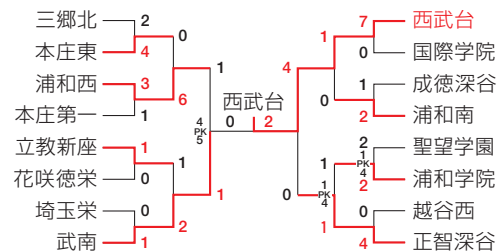


※優勝した平成国際大学、準優勝の埼玉大学、3位の城西大学が関東大会に出場

2種・高校

2021年度 高校サッカー関東大会 埼玉県予選

4月17日~29日 浦和駒場スタジアム他



※優勝した西武台、準優勝の武南は関東大会に出場



決勝 西武台 vs 武南



優勝 西武台



準優勝 武南



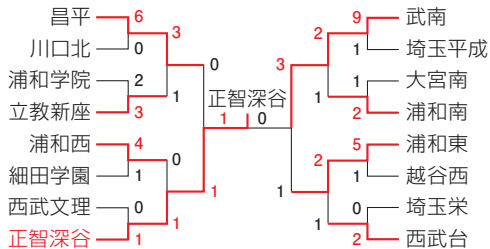
準決勝 西武台 vs 正智深谷



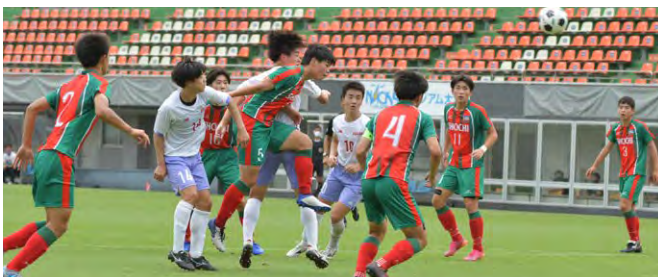
準決勝 武南 vs 浦和西

令和3年度学校総合体育大会 兼 全国高校総体サッカー大会 埼玉県予選

6月6日～23日 県内各地



※正智深谷が全国高校総体サッカー大会に出場



決勝 正智深谷 vs 武南

3種・クラブ

第36回日本クラブユースサッカー選手権(U-15)大会 埼玉県予選

4月24日～5月8日 県内各地

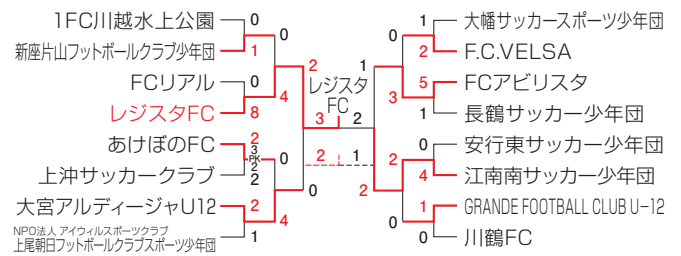
- 第1代表 ブレジュール入間 1-2 成立ゼブラ
- 第2代表 坂戸ディプロマッツ 4-0 GRAMADO TODA
- 第3代表 FC深谷 0-1 三郷ジュニア
- 第4代表 ACアスミ 2-0 EC JOGADOR
- 第5代表 1FC川越水上公園 4-0 武南ジュニア
- 第6代表 クマガヤSC 2-1 CAアレグレ
- 第7代表 東松山ペレーニア 5-0 FC FESTA

※7チームと関東リーグ出場するチームが関東大会に出場

4種

第45回関東少年サッカー大会 埼玉県大会

6月20日、27日 アーバンアクア公園人工芝サッカー場他



※優勝したレジスタFC、準優勝の江南南サッカー少年団、3位の大宮アルディージャU12が関東少年サッカー大会に出場(本大会は中止)



優勝 レジスタFC



準優勝 江南南サッカー少年団



3位 大宮アルディージャU12



4位 FCアビリスタ



決勝 レジスタ vs 江南南

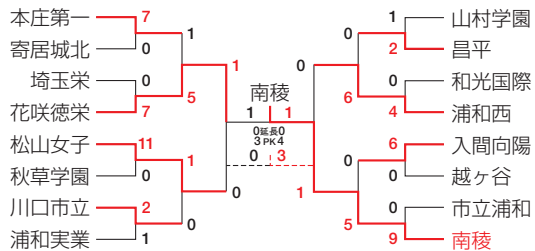


3位決定戦 アルディージャ vs FCアビリスタ

女子

令和3年度学校総合体育大会高校サッカー女子の部

4月24日～5月9日 他



優勝 南陵高校



決勝 南陵 vs 花咲徳栄

フットサル

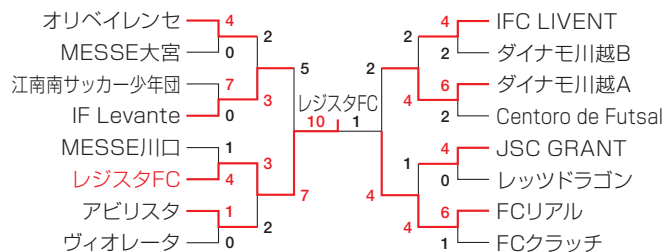
第17回 全日本大学フットサル大会 埼玉県大会

6月6日 彩の国くまがやドーム体育館

1回戦 城西大学体育会サッカー部 3 - 1 大東文化大学ディセツト
 代表決定戦 城西大学体育会サッカー部 5 - 3 東京国際大学体育会サッカー部
 ※優勝は城西大学(本大会は中止)

JFAバーモントカップ第31回全日本U-12フットサル選手権大会

6月5日、6日 彩の国くまがやドーム体育館



優勝 レジスタ FC

県外記録

1種

天皇杯 JFA 第101回全日本サッカー選手権大会

5月22日 テクノポート福井スタジアム
 1回戦 福井ユナイテッドFC 2 - 1 アヴェントゥーラ川口
 6月9日 フクダ電子アリーナ/浦和駒場スタジアム
 2回戦 ジェフユナイテッド千葉 1 - 0 大宮アルディージャ
 浦和レッズ 1 - 0 カターレ富山
 7月7日 浦和駒場スタジアム
 3回戦 浦和レッズ 1 - 0 SC相模原

社会人

第57回全国社会人サッカー選手権大会関東予選

6月6日～20日 関東各地
 1回戦 群馬県教員SC 5 - 1 与野蹴魂会
 Tokyo International University 3 - 1 IBU FC(千葉県)
 FCファンタ 2 - 1 RouteHFC(山梨県)
 2回戦 VONDS市原FC 0 - 2 Tokyo International University
 さいたまSC 1 - 5 エスペランサSC
 東京国際大学FC 2 - 4 桐蔭横浜大学FC
 アヴェントゥーラ川口 不戦勝 流通経済大学FC
 代表決定戦 Tokyo International University 1 - 2 VONDS市原ヴェル

2種・高校

令和3年度 第64回関東高等学校サッカー大会

6月5日～7日 山梨県

●Aグループ
 1回戦 西武台 4 - 2 山梨学院
 準決勝 明秀日立 0 - 1 西武台
 決勝 日体大柏 1 - 2 西武台
 ※西武台は3回目の優勝
 ●Bグループ
 1回戦 桐光学園 2 - 0 武南
 ※優勝は桐生第一



Aグループ優勝 西武台



Aグループ決勝 西武台 vs 日体大柏



準決勝 西武台 vs 明秀日立



1回戦 西武台 vs 山梨学院



Bグループ1回戦 武南 vs 桐光学園

2種・クラブ

第45回日本クラブユースサッカー選手権(U-18)関東大会

4月10日～6月13日 関東各地

●グループステージGROUP F

FC ASAHI Youth 1 - 4 FC Gois U-18
 tonan前橋U-18 0 - 15 FC Gois U-18
 栃木SCU-18 2 - 3 FC Gois U-18

※FC Gois U-18はグループ1位でノックアウトステージへ

●ノックアウトステージ

1回戦 東京23FC 0 - 9 浦和レッズユース
 ザスパクサツ 2 - 1 FC Gois U-18
 大宮アルディージャU18 2 - 0 栃木シティ

2回戦 浦和レッズユース 2 - 0 東急スレイエス
 ザスパクサツ 0 - 7 大宮アルディージャU18

※浦和レッズユース、大宮アルディージャU18は本大会へ出場

4種

JA全農杯全国小学生選抜サッカー大会 IN 関東

4月10日、11日 コーエィ前橋フットボールセンター

●予選リーグ

Bパート

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
1	柏レイソルU-12	6	2	0	1	6	3	3
2	フォルトゥナU-12	4	1	1	1	4	4	0
3	新座片山FC少年団	4	1	1	1	3	3	0
4	アイデンティみらいU-12	3	1	0	2	2	5	-3

Dパート

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
1	レジスタFC	9	3	0	0	14	1	13
2	ヴェルフェ矢板U-12	4	1	1	1	9	6	3
3	中野島FC	4	1	1	1	5	5	0
4	VIVAIO船橋SC	0	0	0	3	1	17	-16

●決勝トーナメント

1回戦 レジスタFC 5 - 0 鹿島アントラーズ
 準決勝 柏レイソル 2 - 2 レジスタFC
 (0延長1)
 決勝 三菱養和巣鴨 0 - 4 レジスタFC

※優勝したレジスタFCを含む上位3チームが本大会へ出場(延期)

●3・4位グループトーナメント

1回戦 新座片山FC 3 - 0 ともぞうSC(栃木)
 準決勝 新座片山FC 0 - 3 中野島FC(神奈川)

※優勝は中野島FC



優勝 レジスタFC

女子

令和3年度第10回関東高等学校女子サッカー大会

1回戦 南稜 0 - 0 暁星国際
 (4PK2)
 準決勝 前橋育英 4 - 0 南稜
 3位決定戦 日本航空 8 - 0 南稜

※優勝は十文字。南稜は初出場で4位



準決勝 前橋育英 vs 南稜



3位決定戦 日本航空 vs 南稜

1回戦 南稜 vs 暁星国際

シニア

JFA第20回O-50サッカー大会関東予選大会

4月24日、25日 市原スポレクパーク

●A組予選リーグ

FC浦和シニア 7 - 0 宇都宮FCファミリー
 四十雀クラブ東京50 0 - 0 FC浦和シニア
 横浜シニア 2 - 0 FC浦和シニア

5・6位決定戦 FC浦和シニア 1 - 0 大泉50

※優勝した四十雀クラブ東京50を含む上位3チームが本大会へ出場

2021年度 JFA 第9回全日本O-40サッカー大会関東地区予選会

6月26日、27日 山梨県

●B組予選リーグ

FC西武台 3 - 0 鹿島40雀
 FC西武台 4 - 0 ヴェルフェシニア
 FC西武台 0 - 2 FC船橋

※FC西武台は予選リーグ1位

●順位決定戦

1・2位決定戦 FC西武台 2 - 1 レアル東京40

※優勝はFC西武台。優勝したFC西武台を含む上位3チームが本大会へ出場

編集後記

前号で第4種特集を組み、この109号では「繋ぐ」をテーマに第3種の取材記事を多数掲載しました。種別を超えた強化・育成は永遠に続く課題ではありますが、今回の特集で指導者の皆さまが理念や想いを抱えながら実践され、実績を積み重ねる姿をお伝えできたかと思えます。現場に立たれている皆さまに少しでもお役立ていただければ幸いです。

さて、東京2020大会開催中に埼玉県では3度目の緊急事態宣言の発出となりました。新型コロナウイルスの変異株が猛威を振っています。ここで申し上げるまでもありませんが、ワクチン接種がまだ行き届かない若年層の発症が進行しています。9月以降、これから山場を迎える大会や大詰めとなるリーグ戦…開催に影響は避けられない現状ですが、感染予防と拡大防止へのご協力を、引き続きよろしくお願いいたします。この秋には、躍動感や緊迫感に溢れる試合の様子を今まで以上にお届けできることを切に願っております。(藤田)